文句の言いどおし

吉田健一

朝日新聞社

文句の言いどおし
定 価 280 円
著者　吉田健一
昭和 36 年 4 月 5 日第 1 刷発行
編集発行者　朝日新聞社　伴俊彦
印刷者　図書印刷株式会社
発行所　東京・大阪 小倉・名古屋 朝日新聞社
© 吉田健一　1961年

目

次

1 どこでもそうなのだろうか 七
2 御感想を一つ 一五
3 文句ばかり言うことはない 二三
4 神様が見ていらっしゃる 三
5 芸術祭に参加しよう 三九
6 もうこうしちゃいられません 四七
7 平和を愛しましょう 五五
8 内職に傘の骨削り 六三
9 隣の奥さんが十六ミリを買った 七一
10 外人の方がお出でになる 七九
11 どこか行く所はないだろうか 八七
12 あの頃はよかった 九五
13 何とかなりますよ 一〇三
14 ちょちちょちあばばばば 一一三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

15 の為に戦いましょう 二九
16 日本人のことですから 二七
17 くろがねの 二五
18 ちょっとアメリカまで 一四三
19 まるでパリのようです 一五一
20 お恥しい次第で 一五九
21 やっと少し解って来ました 一六七
22 ばらしちまえ 一七五
23 私には私の考えがある 一八三
24 のようなものでも 一九一
25 文句の言いどおし 一九九

文句の言いどおし

1　どこでもそうなのだろうか

我々が普通にその日その日を暮して感じたり、考えたり、話し合ったりして過す我々の生活と、新聞の記事や雑誌に書いてあることが描く世界の間には、片方が片方と何の関係もないし、又あってはならないことになっているのではないかと思われるような、常識では越えられない溝が出来ている感じがする。いつ頃からそうなったのか解らないが、もしこの片方の世界が言論というものであるならば、例えば幕末には、当時の志士達が唱えた尊王攘夷、或は反対党の佐幕開港、或はもう少し後の文明開化は直接に国民の生活に影響することで、それだからこれに賛成するものも命掛けでそれが出来たし、事実、やった。

併し今日の我々が言論の世界で大問題だというので示されることは、言論の世界ではそうであることなので、新聞を置いて手紙でも書き始めれば、そういう問題が我々にとってどうということはなくなる。自分には難しいことは解らないが云々という言い方がある。併し元来が訳が解らないことは難しいのでも何でもなくて、ただ訳が解らないことなのではないだろうか。

例えば安保であって、今日の今になって我々は何故これがそれ程の大問題だったのか、もっと正確に言えば、どういう具合にその当時の大問題になったのか、少しも納得が行かないままに、問題自体を忘れ掛けている。それを改めて詮索して見ても、何もはっきりする訳ではなくて、もとの日米安全保障条約と改訂されたものの条文を読み比べれば、日米協調の線に沿って今度の条約は幾らか改善されてはいても、改悪されているとは思えないし、日米が協調すること自体が悪いことで、大問題だというのならば、日本がアメリカに隷属する方がもっと大変な問題である筈であり、そのもとの条約が結ばれた時からの何年間かは他のことを大問題と考えて騒いでいて、条約が改訂されて事態が幾らかよくなってから、今度はこれが大問題だというのは、少くとも我々の生活に即した常識では説明が付

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

かない。まさか、政治は複雑怪奇で、政治学博士にしか解らないというものではないだろう。寧ろ、政治はその反対のものでなければならない筈である。

併しこの安保問題が言論界で受けた取り扱いなど、その言論界と我々が我々の日常生活で正当と考えていることの食い違いを示すのに恰好な材料になる。条約の改訂が発表されて以来、新聞、雑誌を通して、改訂の性質に就て具体的な説明に近いものが試みられた例と言えば、確か新聞に改訂された方の条文の全文が一度載せられたことがあっただけだった。それが問題になるのならば、次には改訂された条約と旧条約が実際にどういう点で違っているか、又その違いに即して、旧条約とその改訂の何れを選ぶべきかが論じられなければならなかった。併し議論が集中したのはそういうこと、というのは、安保問題に就ての肝腎なことではなくて、自衛隊は違憲であるとか、日本が中立国にならなければソ連に攻められるとか、これも何年も前から大問題になっては、そのうちに又そうではなくなることばかりだった。又、少くとも言論界ではそのことに注意するものが誰もいなくて、そうこうしているうちに、安保改訂反対に反対することが大問題であることになって、言わば、これだけがあれ程の大騒ぎをした後のただ一つのはっきりした結論である。というこ

とは、反対すべきか、すべきでないのか、まだ誰にも解っていない大問題なので、焦点が振り出しに戻ったのである。

三池の争議も一応は終った。これは安保条約の改訂などということと違って、何万人か、何十万人かの人間の生活を確実に左右する問題でありながら、この争議に就てもそれが本当はどういう性質のものなのか、言論界の動きは我々に何も教えてはくれない。言論界の方で敬遠していた気味もあるが、こういうことこそ我々は専門家や当事者の意見を聞かせて貰いたいので、会社側にどれだけの言い分があるのか、人減らしが絶対に避けられないならば、それがどの程度までで食い止められるものか、又、解雇されたものに就ては正直な所でどういう対策が講じられることになるのかは、一方の当事者とその当事者と結ばれた同者である何十万人かの人間、それもこの同じ日本の国に住むそれだけの数の人間にとって切実な問題なのであるから、我々にとっても見逃せないことなのである。革命の必要だとか、資本主義社会機構だとかいうことでは、これから失業する人達を救うことは出来ない。三池と安保問題が言論界から受けた扱いを見ると、比較的にどうでもいいことは言論界で大問題になって、どうにかしなくてはならない実際の大問題は、責任を回避す

るということもあるかして、ほうって置かれるのではないかという気がする。国語問題など、そうしてほうって置かれている大問題の最たるものの一つである。

今度のオリンピックだって、新聞の報道や、水泳の選手をこれからどうやって育てるかというようなことが方々で論じられているのを読んで、ローマのオリンピックが現実にはそんな話と凡そ違ったものであるのを想像しないではいられなかった。我々が読まされたのは主に日本の選手のことであり、それもメダルを幾つ取ったか、又そのメダルがどんな種類の金属で出来ているかということが先になって、オリンピックの方はどこかに置き忘れられていた。仮にこれが新聞や雑誌で拾う活字だけのことではなくて、何かの間違いで我々が実際にローマのオリンピックのようなものを見ていたならば、そんなメダルなどの話ではなかったことは確実であると思う。第一に、今度のローマのオリンピックに就ての具体的な資料から想像しても、そこで行われた競技はもっと広々としたものだった筈である。もっと快い緊張があって、我々も選手の気持になることを強いられ、それはどこの国の選手であるよりも、凡ての選手であることだったに違いない。

これは当時の新聞記事の論調に従えば、愛国心が不足していることになる。併し愛国心

というのは、そんなに重宝なものだろうか。競技場というのは何か我々を沸き立たせるものがあって、そこに世界の粒選りの選手が現れるとなれば、その中で自分の国の選手にだけ、それが自分の国の選手であるということで気を取られているということは、我々に眼がある限り、起り得ない。それが出来るのは、自分の子供が小学校の運動会に出ている母親であって、何もそれとオリンピックを比べなくても、日本で行われる日米の水上競技を例に取っても、競技で勝って壇の上に立ったアメリカの選手の姿を美しいと思わないならば、切符を手に入れるのに苦労することはないのである。それが日本の選手で、旗竿に日章旗が掲げられる時に我々が感じるものが愛国心であり、そのことにしか興味がないというのは博奕打ちの心理に過ぎない。競馬では、自分が賭けた馬が優勝しなければ割増金が貰えないのである。

それに、今度のオリンピックでは、新聞では水泳の四百メートル自由型で日本が負けたことになっていて、同じ新聞が山中が二位になったことを報じていた。つまり、新聞は山中が一位になることに賭けていたので、この割増金が金メダルだったというのでは下手な洒落にもならない。その上に、だから日本人は困るという言論界用の日本人批判までがそ

こには用意されている。ということは、これは凡て言論界での出来事だったので、本当のことは、我々のうちでローマのオリンピックを見に行ったものは少いならば、そのテレビ放送を思い出せばいい。各選手が飛沫を散らして力泳し、山中が二位に入り、日章旗が旗竿を登って行く。我々のうちで、それを見て、山中が負けたと口惜しがったものがあるだろうか。一位のローズに続いて山中が最後のコースを終り、その山中は日本の選手だった。この事実を、我々が眼前に見た光景に即して解釈することが必要である。

初めに書いたことに戻って、この我々が現に見ていること、直接に経験して我々の生活感情の一部をなすまでになっていることが、それを活字に直したことになっているもの、或は少くとも、それと無縁ではない筈の考えが活字になったものと、こうしていつも食い違うので、そうでないことが余りにも稀な為に、新聞の投書欄に出ている投書までが言論界の専門家から来たものなのではないかと思いたくなる。と同時に、こういう調子や態度に馴れて、我々が普通に感じたり、考えたりすることを活字になる言葉に直せば、この通りの奇妙に偏っていて単純な話になるのだと本当に信じている人間も既にいるかも知れなくて、それならば、そういう人間は普通に考えることと、活字で考えることを区別して暮

しているのである。ひどいことになったもので、この二つの間にある切れ目からまともに生きて行けない不幸がどうかして顔を出すと、差し当り、現代人の性格は複雑であるという風なことでその場を凌ぐのではないかとも思える。頭の具合がお芽出たく出来ていればいる程、複雑ということが好きになるようである。

外国でも、新聞や雑誌が発達して以来、こういうことになっているのだろうか。英国で一時、マーガレット王女がこと毎に噂の種になって新聞を賑した際に、そういう見出しの新聞が散らばった階段を登った所に玉座が一つ置いてあり、その背に「王室の尊厳」と書いてある漫画が或る漫画雑誌に載っていた。実に保守的であるというのではない。問題は、我々が地道に考えていることを言い表す言論が日本では許されていないのかということなのである。例えば、英国でその役目を果しているのは漫画だけではない。併し今の日本では、それが許されていないらしい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.